



電 信 柱

Telephone Pole

後 藤 顕之輔
Kennosuke Goto

EICA 名誉会員

今年の5月に、日本を訪れた外国人の数が1000万人を超したとのことである。これまでの最速での達成となる。この勢いでゆくと、訪日客は今年、2700万人に達するだろうと予想されている。数年前の数百万人のお客様からの変化に驚かされる。

1月の末、京都伏見稲荷に家内と行った。山の頂上まで続く朱色の鳥居道を楽しんだ。ウィークデーだというのにたくさんの人出である。そのほとんどは外国人で、更に、話されている会話から中国または台湾の方々であった。子供達が、お御籤のガラガラに興じている様子は、異文化に対する興味であろう。高額な商品や化粧品を大量に買込む、所謂“爆買い”は既に少なくなり、春には花見や、夏には登山といった体験型の旅に移ってきているようだ。最近では、特にヨーロッパの方は、田舎の辺鄙な山の中の質素な文化に興味を持ち、地元の住民との接触を求める方々も多いと聞く。外国の方々との交流は、特に地方の田舎の人にとって今後の日本の文化の向上と、これまでの地方文化の良さの再認識の面で有効である。

中国の方々の旅先でのマナーが良くなったとよく耳にする。実際にも、私自身の旅先での経験でも好ましい態度を見かけることが多く、嬉しいことである。昭和40年代の頃、日本が少しばかりお金に余裕が出来始めた頃、日本人がヨーロッパで行ってきた行動と、現地の方々の評価を考えると消え入りたい気持ちとなる。

さて、海外の方々が日本に持つ興味が何時まで続くだろうかと考えると疑問がある。旅の楽しさは、究極は景色が美しくなければならぬ。名所旧跡で、街の中で、車窓から見える田園での全ての場所での美しさである。これを阻んでいるのが、日本国中に張り巡らされた電柱・電線である。現在の日本に、電柱が3500万本以上あるという。

私が子供の頃は、電信柱と言っていた。小学校に通う茶畑の中の通学路には、電話線が木の柱に何本もの横の棧木に、無数の碇子で結ばれていた。当時は電電公社と呼ばれていた電話局は、街の郵便局の一角で、女性の交換手が一通話毎に手で通信相手を繋ぐ時代であった。当時の私の村落には、電話は、お寺と農協の支所にしかなかった。通信が現在のような巨大な通信網に育ってゆくと、誰が想像しただろうか。自分の家に電話が引かれることなど考えたこともなく、何年かして農村の集団電話が引かれ嬉しかったのを記憶している。

電力会社の電気を配る電柱は、横の棧木に碇子が3個付いて、3本の電線が張ってあるだけの淋しげな柱であった。この文明の始まりが、内容は巨大複雑な通信網・電力網に育った現在、外見は木がコンクリート柱と鉄棧に変わっただけで、通信と電気が同じ柱に

寄ってたかってしがみついている。この外観は、技術の欠片も美の欠片も無く、都会の街の中を、そして美しい農村風景を汚している。

高校時代に弁論大会があった。その1つに、責任感の強い男のいいまわしで、「電信柱が高いのも、郵便ポストが赤いのも、皆んな私の責任です」という台詞があった。60年前には、電信柱も「花よりだんご」の時代の象徴として溶け込んでいた。この頃は、犬も大切な生活文化として認めていたように思うが、最近の犬は無視しているように見える。この街を汚している電気・通信システムを犬も見捨てたということであろう。極く近い将来、外国の方々も、日本の景色を見捨てる時がくるだろう。

日本の里山は美しい。森や山や谷間が、そして里にある村々の水田を伴っての姿景観が美しいのである。

明治11年(1878年)、今から140年ほど前のことである。この年、1人のイギリス人女性、イサベラ・バード(1831~1904年)47歳が日本にやって来た。そして7ヶ月の滞在の中で、東北・北海道の3ヶ月に渡る旅や、京都・伊勢の旅をしている。彼女は、宣教師・外交官・商人といった公的な役割を持った者ではない。健康を回復する為の旅であった。その彼女は、明治維新からほど遠くない日本の姿を、特に日本の農村の景観について、美しく表現している。すべてが家庭的で美しい、雑草は見られない手入れの行き届いた庭園のようだと評価されている。山形の置賜盆地の景観にいたっては、アジアの桃源郷(アルカディア)とさえ称賛されている。旅先での辛辣な表現の筆致には息苦しさも感ずるが、日本の里山を、日本人の働き方も含めて、最も愛してくれた人だと考える。

昨年2016年12月に無電柱化推進法が施行されることとなった。日本の景色を愛でる人々にとって、こんなに嬉しいことはない。生活向上のための通信・電気を安易に得る手段として、“美”を忘れてきてしまった近代日本の貧しい現実主義の1つからやっと解放される。考えてみれば、学生時代から会社生活を終わるまで、約50年間電気工学を学び、そして技術屋として仕事をしてきた。この間、電線の地中化に対して、何の貢献も出来なかったことを悔やむ。

街をきれいに保ちたいと考え、また景観を観光の売り物としてきた地域は、無電柱化に早くから取組んできた。金沢市では、既に約30年前から、「金沢方式無電柱化推進実施計画」を策定して、様々な整備手法を取り入れて実施してきた。

今後、無電柱化の法律及び施行令が整い、予算化もされてくるであろう。しかし、重要なことは、声の大きな都市よりも、声の小さな農村の里山の景色を取り戻すことである。